

道徳	ね ら い	被災地の友だちに思いやりの気持ちを持ち、ともに助け合って生きていこうとする心情を育てる
----	-------------	---

【題材】「いなむらの火」

幕末から明治時代にかけて家業のみならず、近代日本の発展に尽くした濱口儀兵衛の話を紙芝居にしたものである。1854年、のちに「南海の大地震」とよばれる地震に遭い海水の異常なひき方を見て津波が来ることを予見した儀兵衛は、自分の田に積み上げられていた収穫後の稲むらに火をつけて村人の注意を引き、危険を知らせ、村人の命を救った。この話は1937年から1947年まで「稲むらの火」として小学国語読本に採録され、多くの子ども達に感銘を与えた。

【対象】

- 2・3年生を対象に「いなむらの火」の紙芝居を読み聞かせる。
- 1年生から3年生まで平田小へ手紙を書く。

【復興教育の視点】

- 紙芝居から、地震や津波についての理解を深める。
- 高学年の被災地現地学習会の報告を受け、同じ郷土岩手を生きる人間としてのつながりを意識した活動を進めようとする態度を養う。

【実践の概要】

- 2・3年生に「いなむらの火」の紙芝居を読み聞かせ、儀兵衛さんに手紙を書いたり、自分の経験をふまえながら感想を書いたりする。
- 自分達が育てた二子里いもを学校の畑から掘り上げ、手紙を添えて平田小学校に送る。



【実践の詳細】

1 「いなむらの火」の読み聞かせ

2年生の感想

- ぎへいさんへ
ぎへいさんが村の人をまもろうと、じぶんが大切にそだてたいねをやいて「つなみが来るよ。」ってみんなに教えて、ひなんさせようと思ったので、すごいね。

- ぎへいさん、つなみで村がながされてかなしかったですね。でもみんながぶじでよかった。
- くろい大きななみが来て、とてもこわかった。ぎへいさんはいねに火をつけるとみんなが見るとすぐ気がついてすごいです。

3年生の感想

- ぎへいさんはすごいと思います。自分が一生懸命育てた稲に火を付けたなんて信じられません。人を助ける時はまさにこんなことが必要になるんだと思います。一人で四百人も助けたなんて。真っ黒い津波の絵を見て、3月11日の津波の映像を思い出しました。あのときだって真っ黒い

津波が何もかものみこんでしまっていました。この紙しばいを読んでもらってぎへいさんのようにゆうきをもって行動したいと思いました。

・わたしは、ぎへいさんという人のゆうきにおどろきました。大切な自分の稲をもやしてしまったけれど、みんなをまもるならこれしかないんだと考えたのだと思います。でもそのおかげで村の人全員がたすけられました。去年のつなみでは、たくさんの大切ないのちがきえてしまいました。わたしの家ではさらが落ちただけでしたが、テレビでは福島やりくぜんたかたなどいろいろなどころが出ていました。今、自分が生きていて元気に生活できることを大切にしようと思いました。

・「いなむらの火」のかみしばいを見て、村の人が全員助かったから安心しました。去年の地震ではほとんどの人がつなみがくるのが分からなくて、流された人が多くいると聞きました。ぎへいさんはつなみがくるのが分かっている、大切に育てていたいなむらに火をつけて、みんなに知らせて命をたすけたのが本当にすごいと思いました。

2 二子里いもプレゼントの準備

自分たちが育てた二子のさといもを味わってもらおうと手紙を書いた。

平田小のみなさんへ

・きのうは、いもっこフェスティバルでした。1～3年でいものこをほりました。そして平田小におくります。だからどうぞたべてください。

・ぼくたちが育てたさといもをたくさんたべてください。いものこじるにするととてもおいしいですよ。

・二子名物のいものこです。たくさん食べてください。

・二子のさといもをおいしく食べてください。みなさんのところは家が流されたりしてたいへんだったかもしれません。でも前をむいてがんばりましょう。

